

## 中島敦にとつての〈南洋行〉

——昭和初期南洋という「場」——

杉 岡 歩 美

はじめに

中島敦。明治四十二年に生まれ、昭和十七年に三十三歳という若さでこの世を去った。彼の生きた時代、それは日本が大国化を目指し世界に台頭した時代であり、他の国々との争いが頻繁に起こっていた時代でもあった。日本という国が、他の国をも貪欲に取り込もうとした時代だったのである。

国語教師、そして作家として生きた中島にとつては、「文字」そして「日本語」というものの力は日々強く実感されるものであったに違いない。そんな中島にとつて他国の人々が「日本語」を学ぶということはどういったものだったのであろうか。

中島敦の生涯は短いものであったが、しかしながら、浅いものではなかった。それは中島自身の教養の深さからであり、またその多

様な人生経験ゆえのものでもあった。当時、日本の植民地下に置かれていた朝鮮半島及び中国、そして南洋群島の両方を訪れるという体験は中島に何を与えたのか。特に自ら望んで向かっていった南洋群島とそこに住む人々との関わりの中で中島敦が得たものは何か。

中島敦と〈南洋行〉については近年、研究が活発に行われている。〈南洋行〉という経験が中島敦文学に与えた影響を読み取ろうとする研究は多い。事実、中島の代表的といえる作品が〈南洋行〉前後に成立しており、その影響は看過できないものであろう。

また、二〇〇七年十一月には世田谷美術館で「パラオ—ふたつの人生 鬼才・中島敦と日本のゴーギャン・土方久功展」(二〇〇七年十一月十七日—二〇〇八年一月二十七日)が開催された。このことは、世間での関心の高さを示しているといえよう。土方と中島は、昭和十六年七月、パラオで知り合うことになる。また翌十七年一月

には二人でパラオ本島一周の旅に出ており、二人の近さを感じ取ることが出来る。本稿では土方と中島の比較なども行い、中島にとつての〈南洋行〉の意味を探っていききたい。

## 一

昭和十六年六月から中島は、サイパン、パラオ、トラック諸島、ボナベ島、クサイ島、ヤルト島、ボナベ島、トラック諸島、パラオ、ヤップ島、ロタ島、テニアン島、サイパン、パラオの順に南洋を渡り歩いている。中島が亡くなったのは昭和十七年十二月四日であった。その死の前年、昭和十六年六月から昭和十七年三月まで中島は文部省図書監修官釘本久春の斡旋により南洋庁内務部地方課国語編修書記として南洋に赴いている。

中島が南洋行の決断をしたのには数々の理由があると推測されている。

まず金銭上の問題が挙げられる。昭和十六年六月二十八日付中島田人宛置手紙に「みんな貧乏人根性のさせる業です（こんな下らぬ仕事に就かうとしたのは）恐らく僕の幽霊は、書かれなかつた原稿紙の間をうろつき廻ることでせう。」と書かれている。中島が金銭的に困窮していたのは友人たちに宛てた書簡などからも窺える。実際、この〈南洋行〉にはそういった目的もあったのだろう。しかし、

この当時初老といっても過言でない父、中島田人に横浜高等女学校の職を引き継いで貰ってまで〈南洋行〉を強行した理由はこれだけではない。

南洋への憧れ、それが中島を決断させたのではないだろうか。私小説的、と評される作品『狼疾記』（昭和十一年カ）に「其の頃三造は斯ういふものを——原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、其の写真を見たりする度に、自分も彼等の一人として生れてくることは出来なかつたものだらうかと考へたものであつた。確かに、と其の頃の彼は考へた。確かに自分も彼等蛮人共の一人として生れて来ること出来た筈ではないのか？　そして輝かしい熱帯の太陽の下に、唯物論も維摩居士も無上命法も、乃至は人類の歴史も、太陽系の構造も、すべてを知らないで一生を終へることも出来た筈ではないのか？」との記述がある。ここで読み取れる中島にとつての南洋は「原始的な蛮人」が住む土地、文明を忘れさせてくれる場としての南洋である。

では、当時の南洋群島はどういった土地だったのか。〈南洋行〉中、中島が懇意にしていた人物に土方久功がいる。土方と中島は現地で小旅行を共にするほど密接に関わっていたのだが、その土方のエッセー「敦ちゃん」（昭和三十三年三月）に「私と言えば既に南洋に十年余もいたのだが、日本人のいないサトワヌ島と言う小島に

七年もいて、再びバラオに出て来てみると、バラオはすっかり変り  
はてて居り、殊に役所（南洋庁）のあつたコロール島は、殆ど日本  
人の島になり（中略）昔の、言わば眠つたような南洋ではなくなつ  
てしまつた<sup>①</sup>とある。

中島自身の書簡にも「僕は今迄の島でヤルトが一番好きだ。一  
番開けてゐないで、ステイヴンスンの南洋に近いからだ。だが、竹  
内氏にはせると、「南洋群島でヤルトが一番いい、といつたの  
は、あんたが始めてだ」さうだ。ヤルトは不便だ、とみんながコ  
ボスといふ。寂しいともいふさうだ。僕は、まるで反対だ」（昭和  
十六年十月一日付中島たか宛書簡）との文章がある。南洋群島は、  
中島の思い描いていたものではなく、日本化された土地であつた。

## 二

そもそも中島は教科書を編纂するために〈南洋行〉を行つたので  
ある。当時の日本の、南洋における教育について触れていこう。ま  
ず挙げられるのが、昭和十三年十月二十日に南洋群島教育会が発行  
した『南洋群島教育史』の「はしがき」に「我が南洋群島に於ける  
教育は、赤道の下、皇国海の生命線を守るべき第二の国民を育成し、  
又、新附島民を撫育教導して真箇の皇民と化する点に於て特異且重  
大なる意義を蔵し、其の成果は、皇国群島統合の成果と共に永く光

を伝ふべきものである。」との文章が掲載されている。ここで注目  
すべきは「南洋群島に於ける教育」が「真箇の皇民と化する」こと  
を目的としているという部分である。中島が南洋群島に赴いたのは  
南洋庁内務部地方課国語編修書記としてであり、現地での国語教科  
書の編纂が彼の仕事であつた。すなわち、南洋群島に住む人々を  
「真箇の皇民と化する」ことが求められたのである。

南洋経済研究所が昭和十九年九月十日に発行した『南洋群島島民  
教育概況（中）「はしがき」』には「南方原住民の教育は日本及日本  
人に課せられた大きな問題の一つである。あらゆる角度から之を研  
究して、最も適切にすることに努めねばならぬ。之迄欧米人が行ふ  
たこともよく研究して其の害を除くことも必要であるが、特に我国  
従来の外地に於ける体験を十分に活用するのが最も賢明である。」  
とあり、「○小学校規則改正の要旨」に「之から人とならうとする  
未開無智の者を教化するのであつて、人として現存して居る者を更  
に人たるべく教育するの域に達して居る者でない事を忘れてはなら  
ない。」とあつた。「未開無智の者を教化する」という意識があつた  
ことが窺えるのである。

同じく『南洋群島島民教育概況（下）』内には「○国語読本第二  
次編纂（元南洋庁嘱託 芦田恵之助）」が掲載されている。芦田恵  
之助は中島教よりも前に、彼と同じ職業に就いていた者であるから、

当然求められていたことは近いと考えられるのだが、その芦田は「二、南洋群島国語読本を編纂するに於ける根本方針は、一に国語を学習することによつて、島民の幸福を増進することを第一義としました。まづ島民の生活に文化の意義を発見することから出発して、内地の文化、欧米諸国の文化等を想像の上に学ばせるやうに工夫致しました」と言う。

現在、琉球大学図書館には、矢内原忠雄の資料が数多く保存されている。その中に、矢内原が作成した「南洋群島島民教育に関する質問書」への回答が残されていた。彼が南洋群島の学校の校長に教育に関する質問を行い、回答を表にまとめたものであるが、その回答を一部抜粋すると次のようなものであった。<sup>②</sup>

1、修身科（1）主たる教育の目的は何か

ロタ公学校「徳育」

ヤップ支庁並公学校「徳性の涵養」「道德実践の培養」

トラック春島公学校「善良たる社会の一友たる性格の涵養」

トラック支庁「勤勞 親睦 正直 従順 清潔 感恩」

トラック水曜島公学校「文明人たらしめんとす」

2、国語科（イ）教授用語には島民語を用ふることありや

ロタ公学校「一年一学期にはあり」

ヤップ支庁並公学校「原則上使用せず」

3、国語科（ハ）島民は教育により知能発達して文明人に到達する見込ありと認めらる、か

ニフ公学校「見込充分ならず 先天的能力に欠陥あり」

トラック春島公学校「教育百年うけされてせば見込あり」

ボナベ島キテー公学校「南洋群島に居るのでは見込なしと認めむ」

ボナベ支庁「自求創造にては疑問なるが指導により相当に達すると思む」

ジャボール公学校「環境と教育の方法に依り達し得られるが群島のみに居住しては困難」

4、国語科（4）島民、就学は自発なりや 又は官の奨励に出づるや

ロタ公学校「自発的」

ヤップ支庁並公学校「官の奨励」

ニフ公学校「官の奨励」

トラック春島公学校「約8割 自発 其の他は官の奨励」

トラック支庁「自発的多くなれり」

メタラニウム公学校「官の奨励 最近自発的になりかあり」

サイパン公学校「募集ニヨリテ応募 自発的」

ボナベ島キテー公学校「主に官の奨励、1/3位は自発的」

れは遠路と関係もあり」

「教育の目的」を「文明人たらしめんとす」と回答する、また「島民は教育により知能発達して文明人に到達する見込ありと認めらるゝか」という質問の存在そのものが、「文明」のないものに教育を与えることで「文明人」にしようという当時の政策を表しているのではないか。

昭和八年に南洋庁サイパン公学校が発行した『学校経営要覧』には「本校教育方針」として「生活ノ向上改善ニ必要ナ普通ノ知識技能ヲ授ケルノデアルガ島民兒童ノ現状カラ考察シテ「国語ノ普及」ト「迷信打破」トハ特ニ力ヲ用ヒナケレバナラナイ」とある。さらに「猶島民ハ文化ノ程度ガ低イ」と断言した箇所もあった。

以上のように「日本語」を教えることにより「文化」を与え、「未開」の民である島民を幸福にしてあげようとする視線が昭和初期から存在していた。但し、それだけではなく、南洋群島教育研究会が昭和七年八月に発行した「群島教育研究」第二十号に「ほんとうに真黒な顔、光る目玉、純白の歯こそかへって物凄い様ゾツとする様な感じが全身に伝はるのを覚えた。然し次の瞬間上を見上げて極めて流調に「今日は」の邦語が口を突いて出た。其の一言で今までおぼえてゐた自分の心もスーッと解けてかへつてなつかしの情さへ感じる様に変つた。何と国語の力は偉大でせう」との文章を見出

せるように、自分にとってわからないものを自分の言葉を用いて制御しようという目論みも働いていたことは否めないであろう。

### 三

旅行者として南洋群島を訪れた作家に久保喬がいる。彼に『南洋旅行』という作品がある。昭和十七年一月十日、金の星社から発行されたものであるが、「あとがき」によると「この本は題のとほり少年少女の読者のために南洋群島に関する事を色々書いたものですが、しかし、単なる南洋の地理解説書とか案内記のやうなものではありません。といふのは、筆者が自からこの地方に旅行して、見聞したり、感じたり、考へたりした事などをのべてみたものだからであります。」「この中にある色々な事に対する筆者の考へ、といふやうなものを引き出して読んでゆかれる事も出来ます。」「例へば、南洋の島民の生活とか、教育とか、政治とかいふやうな特殊な事となり詳しく述べてゐますが、その中には、自ら植民地問題とか、異民族融和の問題とか、或は、未開人の研究による文化人類学的な問題等、色々な一般的普遍的な問題が含まれてゐる、といふやうなわけであります。」とのことである。

久保は中島と同じく南洋に行き、現地における教育を見て、作品を書き上げている。たとえば「朝礼体操」に関して「二十余年間も

南洋で、島民の教育に従事して居られる、サイパン公学校の校長先生のお話をうかがいますと、公学校の主な方針といふのは、島民を立派な日本国民にするやうに、教育することとあはせて、彼等がより幸福な生活が出来るやうに、知識を授けていくことです。それからとかく怠惰者になりやすい彼等を、勤勉な性質の人間にするやうに、改め直すことださうです。」と記述している。

前述したような「幸福にする」という意識がサイパン公学校にあったことが窺えるのだが、久保の感想は「ことに日の丸旗が空にあげられて、その下で君が代を歌ふ、島民の子供たちを見ますと、何か強い感動が胸の中にわいてくるのをおぼえました。」であり、「朝ならば、「オハヤウ」、昼ならば「コンニチハ」と、公学校で教はつたらしい挨拶を、快活な調子でしますので、ほんたうにかはいく思ひました。」というものである。また「ココホレワンワン」の章では「日本のものがとけこんでゐるのだといふことを、感じないではゐられませんでした」とする久保の意識は、当時南洋を訪れた、いわば知識人たちの視線と同質のものであつた。

中島敦はどうであつたのか。中島の書簡を挙げていく。昭和十六年十一月六日付中島田人宛書簡、「現下の時局では、土民教育など殆ど問題にされてをらず、土民は労働者として、使ひつづして差支へなしといふのが、為政者の方針らしく見えます、之で、今迄多少

は持つてゐた、此の仕事への熱意も、すつかり 失せ果てました。もつとも、個人の旅行者としては、多少得る所があつたやうに思ひます」。

昭和十六年十一月九日付中島たか宛書簡、「土人の教科書編纂といふ仕事の、無意味さがつきり判つて来た。土人を幸福にしてやるためには、もつとく大事なことが沢山ある、教科書なんか、末の末、の実に小さなことだ。（中略）なまじつか教育をほどこすことが土人達を不幸にするかも知れないんだ。オレはもう、すつかり、編纂の仕事に熱が持てなくなつて了つた。土人が嫌ひだからではない。土人を愛するからだよ。僕は島民（土人）がスキだよ。南洋に来てゐるガリガリの内地人より、どれだけ好きか知れない」。

前々章で触れたが「ヤルト」は日本化されていない島であつた。そこを「一番好き」といい、「ステイヴンソンの南洋に近いからだ」という中島には、南洋は「未開」のままできてほしいという願ひと同時にある、「未開」の者へ教育を与えてあげようといった思いが垣間見えるのである。この「未開」の者への教育という姿勢においては、中島と当時の国語読本編纂者たちとの間に共通するものがある。

しかし、中島が国語教育を懐疑していた様が窺える文章が残っている。教科書編纂へのコメントである。中島のコメントに「島民の

實際生活に非ず」「島民少女らしき色彩は出ぬものか、之では内地の少女と変りなし」「絵、ヤップの古俗とは禪が違ふ」「島民古来の航海術に触れる要なきや?」「マツチよりも島民に親しき鯉節製造を例にとつては如何?」などあり、「島民」らしさを重要視している様が窺える。「島民」を「島民」として見、「島民」にとつてわかりやすい教育を与えること、これが教育者としての中島の視線の中心にあつたのではないだろうか。

昭和十七年二月一日、中島は南洋群島文化協会発行の「南洋群島」二月号に『旅の手帖から』を、同じく「南洋群島」三月号に『章魚木』を発表している。『章魚木』に「数日後、アイマミリーキから瑞穂村への道で私は又たこの木の群を見た。しかし、これは幹もすくすくと伸び葉も折れず裂けず、極めて大人しい個性の無いたこの木共であつた。アルコロン<sup>①</sup>のたこの木は突然一喝をも喰はせかねない勢だつたが、此処のたこの木達は、声を揃へて大人しくコンニチハと頭を下げさうな、良くしつけられた優等生ばかりである。飼慣らされた檻の中の猛獸を見る時のやうな味気無さを私は感じた。」とある。

当時の南洋群島を訪れた日本人の中で、「島民」を「島民」としてみようとした視線は、異質のものであつただろう。

#### 四

南洋で中島と親交を持った人物に土方久功がいる。土方は二十九歳の年、昭和四年三月、南洋航路船「山城丸」でパラオへと向かう。パラオではもっぱら神話伝説の収集にあたる。昭和六年、離島のソソル、メリエル、ブル、トコベイ島を回る。さらに、文明と無縁な孤島へ、との思いからヤップ離島の最東端サテワヌ島へ移住。そこに七年間滞在する。昭和十四年パラオに戻り、南洋庁物産陳列所の嘱託となり民族研究にあたる。昭和十六年、中島敦と知り合う。共にトラック島を含む南洋諸島を巡る。昭和十七年中島と一緒に帰国。翌年サテワヌ島での生活記録『流木』を刊行する。

『土方久功著作集』「月報」によると、土方は南洋に渡る際、「実を云えばこの最後の土人の仲間入りというのが私の最初からの希望なのであつた。(中略)我から引つ込んで土人達の中に入り込もうと云うのが、私のたくらみである」<sup>⑤</sup>との日記を書いたとのことである。

土方久功が「南洋行」に臨み、記した詩がある。南洋への憧れを表現した詩には「青い海に浮かぶ」(昭和三年三月)という題が与えられている。また「黒い海」(昭和三十一年六月)という詩がある。そこでは、自身の「青い海に浮かぶ」に触れ「その妙な詩の中

で 私は 文明の虚偽と不倫とをはかなみ 裸の土人たちの——実はまだ知らない裸の心を 夢み 憧れ そして礼賛したのだった」と書く。そして「(文明人の華やかな衣装につつまれた体と 厚化粧にぬりこめられた心との間にある距離は!)」「青い海は黒い海になつてしまったようだ」という文明への懐疑の姿勢も示しているのである。

土方久功と中島敦とを結んだものは何だったのか。土方は後に「トン」(『土方久功著作集』に収録。生前未発表)と言うエッセーを執筆する。「トン」というのは中島敦のあだ名である。土方は「短いあいだに「トン」と私には、あの無くてはならない筈の友達になつていたので」と書く。「パラオでのトンと私」(昭和三十二年三月)で土方は「私はまた、お役人臭と云うものを全然身につけていなかったはずで、(実際私は役所の人とは殆ど深く付き合う人がなく、熱帯生物研究所に来ていた若い動物学者たちとばかりつきあつていたのでした。)そう云うところがトンチャンをたいへん気楽にしたのだと思います」と振り返っている。中島が役所の人間と気が合わないと感じていたことも一つの理由であつたのだろう。

昭和元年十一月二十五日の「日記」、これは初めての個展への口上となるものだが、そこで土方は「私は素人の余技が好きです。」と述べ、「私の云うような素人の楽な気持と絶対の自由を持つて居

るのは、玄人のなかつた古代人と玄人のない未開人と、そうして世間風に歩かない所の芸術の少人数の無信仰者だけです」という。これは、中島の「原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、其の写真を見たりする度に、自分も彼等の一人として生れてくることは出来なかつたものだらうかと考へた」(『狼疾記』)という意識と近いものであつた。

実際に南洋に赴いた土方は「未開人」に溶け込もうと裸で生活している<sup>⑥</sup>。しかし、その土方でさえ「文明人」である自分から完全に逃れることは出来なかつた。

土方は詩「孤島」(昭和三十二年六月)の中で、サテワヌ島で嵐のために死んでいった「土人」たちに触れ、「それにもかかわらず私に飛びかかる考え「彼らは蟻だ」何千何万来 生きて死んで来た虫けらの大ものだ」と書く。また「黒い海」では「鳥か魚のような種類としての土人たち」<sup>⑦</sup>と表現する。『流木』(昭和十八年三月、小山書店)の「はしがき」では「未開人」の生活がどれだけ島民自身が作り上げた網のような規定に支配されているかに触れたうえで「われわれ文明人の頭でわり出したような批判によつて、その一部をでさえも急激に覆しでもしたならば、たちまちこの調和は乱されるであらう」と述べ「要はいかに上手に、彼らに大きな犠牲をはらわせずに、彼らを救いあげてやるかにある。その必要をひしひしと

認めなければならないことを、本書は提唱するのである」としていている。

中島と土方を近しくしたのは、「未開人」への憧れ、共鳴であった。そして、文明を懐疑しつつ「文明人」の意識から抜け切れなかった、そういった共通点も二人を結びつけたのであろう。ただ、二人の〈南洋〉への距離のとり方がまったく同じであったかという点、そうではない。

土方の「青い海に浮かぶ」という詩に以下の表現が示される。「金色の水々しいパイアか 滴るマンゴの甘露を吸って暑い昼時を休み まどろむかもしれない そんな時 私たちはお互の生まれについて話したり あるいはお互いの知識を交換したりするかもしれない 彼女はこんなふうに話しますがも知れない」と。また詩の最後は「そして私は彼女に私の悲しい過去を笑ってもらっても一度 彼女の話をはじめから話してもらおう そして私も今まで身に積もった着物を一枚ぬぎ そして又一枚というふうになぎすてることにしよう」で閉じられる。「お互いの知識を交換」する視線、つまり「土人」からも「知識」を得ようとする考え、これこそが土方独自のものであったのではないだろうか。

パラオにおける「旅日記」（昭和十七年十一月）でも土方は「子供たちに日本語を教える」ということは、それより以上に彼らからこ

の島の言葉を習うことになるからである。」との感想を持つ。土方の、「土人」とともにあり、「土人」から学ぶという意識はこの当時、南洋群島を訪れた人々の中でも特異なものであった。土方久功は数多くの彫刻を残した。それらは「カイバツクルというパラオ土民の用いる独特の手斧で彫られている」<sup>⑧</sup>もので、土方が実際に触れてきた〈南洋〉を対象としたものである。土方は芸術を「土人」たちの芸術から生み出していったのである。

一方の中島が、南洋を題材として書いた作品は『幸福』『夫婦』『雞』『寂しい島』『爽竹桃の家の女』『ナポレオン』『真昼』『マリヤン』『風物抄』であり、これらは『南島譚』（昭和十七年十一月十五日、今日の問題社）の総題の下、纏められ出版される。

南洋を題材として書き上げた作品は土方に取材したものが多い<sup>⑨</sup>。たとえば『ナポレオン』の題材は土方久功の草稿から構想された。<sup>⑩</sup>『雞』という作品も土方から聞いた話を素材としている。戦後、土方は『鶏』（昭和三十二年六月）というエッセーで「もう大分前になくなった中島敦は、パラオに来ていた頃、毎日かかさず私の家に入りびたっていた。そして私の日記帳をあちこち引きずり出しては読んでいたが、時々「土方さん、この話、僕にくれませんか」と言った。「ああ、どうぞ」と私は答える。」と中島との交友を回想している。土方が中島に与えた話とは——病に悩む老人に、病院の先

生から「レンゲさん」（キリスト教布教者で薬を島民に施していた人物）の元に通うゆるしを得るよう頼まれた土方が快く引き受け、そのことに感謝した老人が、自分の死後、土方に鶏を送るようにと何人にも遺言したために、土方は後日三人から鶏を送られた——といったものだった。この話を紹介した後には、「こんな純粋な気持、こんな一途な気持——それを若い頃まで、互いに戦争ばかりしていた、そして死首を得てはブラバオル首踊を踊って村々をまわった島民が持っていたことを知り、ただただ敬虔な何者へともない祈りを祈ったのであった」との土方の感慨が付されている。

しかし、中島が描いた『雞』は全く違った様相を呈している。土方が老人を「優しい心を持った爺さん」と記したのに対し、中島は『雞』の中で老人を「とんでもない喰はせもの」として描く。——民間俗信の神像や神祠などの模型を蒐集していた「私」は老人に模型を作らせていた。老人に支払う金銭の相場がどんどんせり上げられ、ついには模型自体にも不審な点が多々現れるようになる。「私」が老人を怒鳴りつけると「石の様な無表情さ」を見せ、老人は懐中時計とともに私の前から姿を消す。——

土方にとつて鶏の一件は、島民の「純粋な気持」に触れた体験であった。しかし『雞』の「私」にとつては「あの時計の事件によって私の心象に残された彼の奸悪さと、今の此の雞の贈り物とをどう

調和させて考へればいいのだらう」と困惑させるものであった。中島は「未開人」を、「文明人」の憧れを反映した、純粋なだけの存在として捉えているのではない。ここで老人の「奸悪さ」を強調することにより、人間の両面性、「不可解」さを描き出したといえるのではないだろうか。中島は『雞』において、「島民」を「島民」として見ようとしていた。

土方は「さて作家というものは、ただこれだけの材料があれば結構気のきいた短編小説を書いてしまふ。「どん底」のせりふではないが、「……そいつがまた職人の中でもなかなか腕のある野郎でね……犬の皮から奇麗な白熊の皮をこしらえるんだ……猫の皮を染めてカンガルーの皮にするんだ……麝香鼠にするんだ……」（『雞』）と書く。

『南島譚』は「南島」を物語化することにある、といえる。物語化するということは、そこにあるものをありのまま伝えることは異なる行為である。中島は「土人」の姿をそのまま描くこと、〈南洋〉で感じた違和感を表現することよりも、自分の書きたいこと、伝えたいことを小説にして世に出すことを選択した。

『雞』という作品は「それは兎も角として、南海の人間はまだ〈私などにはどれ程も分つてゐないのだといふ感を一入深くしたことであつた。〉との文章で閉じられる。「わからない」という作品

構造に中島は意図的に持つていつているのである。「わからない」存在として〈南洋〉を外部に配置しようとする中島の考えが示されているのではないか。中島にとって〈南洋〉は「文明人」である自己を再認識する「場」として機能した。後年、『弟子』『季陵』といった作品が生まれたのも〈南洋行〉なしにはありえなかったと思われるのである。

おわりに

〈南洋行〉後の昭和十七年、中島は「新創作」の編集責任者・船山馨に依頼されて『章魚木の下で』を書いている。

中島は書く。「章魚木たこぎの島で暮してゐた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別してゐたのは、「自分が何か実際の役に立ちたい願ひ」と、「文学をポスターの実用に供したくない気持」とが頑固に素朴に対立してゐたからであつた。章魚木の島から華の都へと出て来ても、此の傾向は容易に改まりさうもない。まだ南洋やま呆まけがさめないのかも知れぬ」。

ここで中島は、戦争と文学とを区別し、文学に生きていくことを宣言している。その言葉通り、〈南洋行〉以後の中島は〈南洋〉に留まるのではなく中国を舞台とした作品を精力的に書き上げていく。

中島は土方とは違い、「土人」の中に入り込み「土人」の芸術か

中島敦にとつての〈南洋行〉

ら学び、作品を創り出すことを選ばなかったのである。〈南洋〉は中島に「文明人」としての自己を再び認識させる「場」となった。しかし、中島の「島民」<sup>①</sup>として見る視線、つまり「不可解」なものとして他者を認める視線が、〈南洋行〉以降の中島文学に備わったことは確実であろう。

本稿では中島が〈南洋行〉で得た視線について主に考察を加えてきた。作品への影響は別稿を期したい。

注

① 他に土方がパラオについた触れた文章に「昭和十四年―サテワヌ島からパラオに出て来た時に、三ヶ月ばかり東京に帰つたのですが、その時、十年ぶりでこのテナヤン島を訪れたのです。あの鼠だけの世界だったジャングルは、かげひとつとどめず、全島それにかわつて砂糖黍畑に生れかわり、日本人の家で大きな町が出来、そこにあふれ出た子供たちで、テナヤン小学校は南洋群島一の大きな小学校になっていたのです。サテワヌ島から満七年ぶりでパラオに出てきた時、パラオの変わり方にびつくりしたのですが、南島に渡つて満十年たつて立ち寄つた、このテナヤン・ジャングルの転身発展にまたまた目をみはり、十年と云う月日の恐ろしいような力と重さ、金力と機械力と、東になった人力と、わが身、一身の十年を比べ見ないではいられなかったのです。」(『僕のミクロネシア』昭和四十九年二月)という回想がある。

② 矢内原忠雄は昭和七年に太平洋問題調査会より南洋群島の研究を委嘱されており、これらの質問書への回答も同じ頃と推測されている。また、

琉球大学図書館所蔵の矢内原忠雄文庫は現在電子化され、ネット上で閲覧が可能になっている。今回、「南洋群島島民教育に関する質問書」の一部を引用させていただくことをお許しいただいた琉球大学図書館及び関係者の皆様に深く感謝したい。

- ③ 中島の国語読本へのコメントは「中島敦全集」第三巻に収録されている。また、浦田義和氏が「占領と文学」（平成十九年二月二十日、法政大学出版局）で南洋群島国語読本のページを引用した上で詳細に述べておられる。

- ④ 土方によると「トンは前から一度本島（パラオの役所があるところはコロール島と云う小さな島で、その北に接してパラオの主島をなすパベルダオ島があるので、それを本島と言いならわしているのです。）につれて行ってくれと言っていたのですが、なかなか行き違つて実現しないうでいたのです。で、戦争がはじまつてしまつて、トンも私も病気がよくなるので、もう二人とも役所をやめて内地に帰ろうと、いつていたその帰る前、十七年の正月のことです。一月十七日から三十一日まで、十二日をかけてトンと二人だけで本島一周をしたのです（「トちゃんとの旅」生前未発表表）」とのことである。

- ⑤ 『土方久功著作集』第二巻「月報」に掲載された土方敬子「土方久功の足跡」2より引用した。

⑥ 『土方久功著作集』第八巻「土方久功年譜」によると昭和六年に「パラオでの二年半は、島中を歩き廻り、それも島民とほとんど変わらない裸の、裸足の生活をやってのけた」とある。

また土方自身も「わが青春のとき」（一部を除き生前未発表）において「この最後の――土人の中にのめりこむことによつて、私は南洋に賭けたと言つてもいいだろうか。裸で跣で土人の暮らしをする。「土人」になれた訳ではないが。」と書いている。

- ⑦ 『土方久功著作集』第六巻より「黒い海」。前後を少し引用する。

そんな木々のように芽生えて 生きて 死んでいく  
多分 個の意識さえ意識されなければ  
死んでは甦る 死んでは甦る

言わば鳥か魚のような土人たちの生活が悲しくなつた

裸で生まれて来て 裸で育ち 裸で死んで行く……

鳥か魚のような種類としての土人たち

それにもまして まだ被われない裸の心

その運命はかなしい

しかしあすこでは正しきは正当にただしかつたし

小さな嘘は小さな間違いしかおこさなかつた

- ⑧ 宇佐見英治「土方久功の彫刻」（『土方久功著作集』第八巻）

- ⑨ 『幸福』は「オルワンガルの沈没」（『土方久功著作集』第三巻）という習慣（『土方久功著作集』第一巻所収「モゴル及びプロポル」を参考か）が描かれている。

- ⑩ 昭和十六年十二月十九日付の中島敦「南洋の日記」に「夜、土方氏方に到り、南方離島記の草稿を読む、面白し。「プール島（人口二十に足らず）に、パラオより流刑に会ひし無頼の少年あり、奸譎、傲岸、プール島民を顧使す、已に半ばパラオ語を忘る。この少年の名をナポレオンといふ」とある。

「南島離島記」には「此の遠いパラオの小ナポレオンが、只一人この様な離島に居る理由が、また香ばしくないのであつて、この、まだ公学校も卒業しない少年が、警察の手にもおえない悪性の窃盗常習の故を以て、この二百哩も離れた、人口十八、九名の離島に流刑に処せられているのである。（中略）他の人達には彼はワカラナイを連発しながらも兎

も角日本語でやっているのである。するとバラオ語を使われると、ずっと気楽にはなるらしい。と同時に気楽になればブル語が口をついて出るらしい。それにしてもたった二年ばかりの間に、生まれてから十年間も、それに親しみ、その中へのみ暮した自分達の言葉を、そんな風に忘れてしまう——のにはあるまいが、話しくなくなってしまうと云うことが有り得るだろうか。多分それは有り得るのだろう。」との記載がある。

〔付記〕 本稿で引用した中島敦の文章は、『中島敦全集』全三巻・別巻一

（平成十三年十月十日）平成十四年五月二十日、筑摩書房）を底本とする。また土方久功に関する引用文は『土方久功著作集』全八巻

（平成二年七月十五日）平成五年十一月三十日、三一書房）を底本とした。原則として旧漢字は新漢字に直し、ルビを簡略化した。

なお、中島敦自身の文章に「土人」など、現代の判断基準では差別用語とされる単語が存在する。しかし、筆者自身が差別を助長することを意図していないと想定され、また「土人」という単語が使われていたこと自体が重要ではないかと考えられるので、本稿ではそのまま用いることにした。